

『福翁自伝』を読む

—日本の近代化と福澤諭吉— (その3)

2012.11.10

準備的考察 福澤のオランダ語→西洋文明との出会い

1. 「金気の国」オランダ

ハプスブルグ家カルル5世の子フェリペ2世統治下のスペイン領。ネーデルランドの中小の貴族・商人・市民層はプロテスタント特にカルバン派(ユグノーの流入など)が多い。1568年あたりから、スペイン統治への抵抗・独立闘争始まり、フェルディ『ドン・カルロ』、1648年ウエストフアリア講和で完全独立。この独立戦争(80年戦争)の間に貿易・海運・毛織物等で猛烈な経済発展を遂げ、富裕になり学問・文化が栄えた。ヨーロッパ随一の先進国。アムステルダムは世界の貿易港となり、アジア貿易を独占し、長崎に商館を設けた。その後イギリスとの争い(三回にわたるイギリス・オランダ戦争)に敗れ、力を失っていく。オランダに代わって、イギリスが西洋文明をリードしていくことになる。

2. 西洋文明の窓口・長崎(平戸)

1609年オランダ東インド会社の日本支社として長崎(平戸)にオランダ商館が設置された。その後日本の鎖国政策と共に1641年長崎の出島に移されたが、そこが西洋文明の唯一の窓口となった。そのような事情でオランダ語が西洋文明を代表する言語となり、蘭学者たちが西洋文明と接することになった。(『蛮社の獄』1825 渡辺華山、高野長英 1874 『解体新書』前野良沢、杉田玄白)

3. 福澤の学問との出会い

- ◇ 家が貧しく、初等教育は放置されていた。
- ◇ 15才の時、人より大差遅れて、中津藩士服部五郎兵衛から四書の素読を受ける。
- ◇ 野本真城、父百助の親友(5才下)、実学の帆足万里、尊皇史家頼山陽の弟子、中津藩の大学者、中津藩改革派の巨頭、にも直接指導されたか？
- ◇ 1829年(15才)白石照山の門下生となる。真城の(18才若い)弟子、亀井昭陽に私淑して古学を重視し、広瀬淡窓や頼山陽を怪視 1833年(諭吉19才)「御固番事件(門番勤務拒否事件)」を煽動したとして中津藩を追放される。その年まで照山のもとで4~5年学ぶ。

4. 長崎遊学(1834年2月)

- ◇ 奥平彦岐、奥平家7巨石取り家老大身格奥平与兵衛の息子、野本改革派、中津藩砲兵隊長予定者
- ◇ 中津藩有力者奥平与兵衛が、息子彦岐の部下となるべき人材として福澤を見だし、彦岐の従者としてその身の回りを世話するとの条件で、福澤を推薦したと考えられる。西洋砲術習得の内々の藩命が二人にはあった。
- ◇ 長崎奉行の役人にして砲術家、山本物次郎の家に住み込みそこを拠点に砲術と蘭学を学ぶ。西洋文明との出会いが始まる。そこで大村益次郎らいろいろな人物と出会う。
- ◇ 福澤は彦岐よりも、相対、上達が早かった。それを彦岐が嫉妬し、自分を長崎から追放する陰謀を画つた。と福澤は思いこんでいる。→1835年春長崎から東京へ出奔

1. 福澤の学問との出会い、修業状況

〔母が一人で

飯を焚いたりお菜を拵えたりして五人の小供の世話をしなければならぬから、中々教育の世話などは存し掛りもない。云わばヤリ放しである。藩の風で幼少の時から論語を読むとか大学を読む位の事は遣らぬことはないけれども、奨励する者としては一人もない。殊に誰だって本を読むことの好きな子供はない。私一人本が嫌いと言ふこともなからう、天下の小供みな嫌いだらう。私は甚だ嫌いであったから休ではかり居て何もしない。手習もしなければ本も読まない。根っ

から何にもせず居た所が、十四か十五になって見ると、近処に知て居る年十四、五歳にして者は皆な本を讀んで居るのに、自分独り読まぬと云うのは外聞が悪いとか恥始めて読書に志すかしいと思つたのでしよう。夫れから自分で本当に読む氣になって、田舎

の塾へ行始めました。どうも十四、五になって始めて学ぶのだから甚だきまりが悪い。外の者は詩経を読む書経を読むのと云うのに、私は孟子の素読をすると云う次第である。所が茲に奇な事は、その塾で蒙求とか孟子とか論語とかの会読講義をすると云うことになる、私は天稟、少し文才があつたのか知らん、能く其の意味を解して、朝の素読に教えて呉れた人と、昼からになって蒙求などの会読をすれば、必ず私とその先生に勝つ。先生は文字を讀む語りでその意味は受取の悪い書生だから、之を相手に会読の勝敗なら訳けはない。その中、塾も二度か三度か更えた事があるが、最も多く漢書を習つたのは、白石と云う先生である。其処に四、五年ばかり通学して漢書を学び、その意味を解すことは何の苦勞もなく存外早く上達しました。白石の塾に居て漢書は如何なるものを読だかと申すと、經書を専らにして論語、孟子は勿論、すべて經義の研究を勉め、殊に先生が好きと見えて詩経に書経と云うものは本当に講義をして貰つて善く読みました。ソレカラ蒙求、世説、左伝、戦国策、老子、莊子と云うようなものも能く講義を聞き、その先きは私独りの勉強、歴史は史記を始め前後漢書、晋書、五代史、元明史

略と云うようなものも読み、殊に私は左伝が得意で、大概の書生は左伝十五卷の内左伝通読三、四卷で仕舞うのを、私は全部通読、凡そ十一度び読返して、面白い処は暗記して居た。夫れで一通り漢学者の前座ぐらいになつて居たが、一体の学流は亀井

風で、私の先生は亀井が大信心で、余り詩を作る事などは教えずに寧ろ冷笑して居た。広瀬淡窓などの事は、彼奴は発句師、俳諧師で、詩の題さえ出来ない、書くことになると漢文が書けぬ、何でもない奴だと云て居られました。先生が爾う云えば門弟子も亦爾う云う氣になるのが不思議だ。淡窓ばかりでない、頼山陽なども甚だ信じない、誠に目下に見下して居て、

(4153)

2. 長崎での生活

イ. 山本家の伝説 — 山本家をかり訪ねた —

「夫れから長崎に行て、そうして桶屋町の光永寺と云うお寺を便ったと云うのは、その時に私の藩の家老の倅で奥平壹岐と云う人はそのお寺と親類で、其処に寓居して居るのを幸いに、その人を便ってマアお寺の居候にな、て居るその中に、小出町に山本物次郎と云う長崎両組の地役人で砲術家があつて、其処に奥平が砲術を學んで居るその縁を以て、奥平の世話で山本の家へ食客に入込みました。抑も是れが私の生來活動の始まり。有らん限りの仕事を働き、何でもしない事はない。その先生が眼が悪くて書を読むことが出来ないから、私が色々な時勢論など、漢文で書いてある諸大家の書を読んで先生に聞かせる。又その家に十八、九の倅が在て独息子、余りエライ少年でない、けれども本は読まなければならぬと云うので、ソコでその倅に漢書を教えて遣らなければならぬ。是れが仕事の一つ。それから家は貧乏だけれども活計は大きい。借金もある様子で、その借金の云延し、新に借用の申込みに行き、又金談の手紙の代筆もする。其処の家の下婢が一人に下男が一人ある。「所で」動もするとその男が病氣とか何とか云う時には、男の代をして水も汲む。朝夕の掃除は勿論、先生が湯に這入る時は脊中を流したり湯を取たりして遣らなければならぬ。又その内儀さんが猫が大好き、狆が大好き、生物が好きで、猫も狆も犬も居るその生物一切の世話をしなければならぬ。上中下一切の仕事、私一人で引受けて遣て居たから、酷く調法な男だ、何とも云われない調法な血氣の少年であり乍ら、その少年の行状が甚だ宜しい、甚だ宜しくて甲斐々々しく働く云うので、ソコで以て段々その山本の家へ氣に入て、仕舞にハ先生が養子にならないかと云う。私は前にも云う通り中津の士族で、遂そ自分は知りませぬが小さい時から叔父の家の養子になつて居るから、その事を云うと、先生が夫れなら尚更ら乃公の家の養子になれ、如何でも乃公が世話をして遣るからと度々云われた事がある。(P. 30 & 31)。

ロ. 砲術家福澤の活躍

その時の一切の砲術家の有様を申せば、写本の蔵書が秘伝で、その本を貸すには相当の謝物を取て貸す。写したいと云えば、写す為めの謝料を取ると云うのが、先ず山本の家へ臨時収入で、その一切の砲術書を貸すにも写すにも、先生は眼が悪いから皆私の手を經る。それで私は砲術家の一切の元締になつて、何もかも私が一切取扱て居る。その時分の諸藩の西洋家、例へば宇和島藩、五島藩、佐賀藩、水戸藩などの人々が来て、或は出島の和蘭屋敷に行て見たいとか、或は大砲を鑄るから図を見せて呉れとか、そんな世話をするのが山本家の仕事で、その実は皆私が遣る。私は本来素人で、鉄砲を打つのを見た事もないが、図を引くのは訳けはない。颯々と図を引いたり、説明を書いたり、諸藩の人が来れば何に付けても独り罷り出て、丸で十年も砲術を學んで立派に砲術家と見られる位に挨拶をしたり世話をしたりすると云う調子であ

る (P. 31 & 32)。

3. 長崎から大阪へー長崎出奔の事情ー

- ・ 諷刺は蘭学を述べ、和蘭通詞の才木に交話を頼んだ。
- ・ 原書と読む力に於て、西者の間には羨が甚多し、且て其の才を羨む如き者も少くない。
- ・ 「母の病氣」と理由に中津へ歸らせられたと云ふ。
- ・ 中津に歸らば、江戸に行くと決まると云ふ。

「処で私を山本の居候に世話をして入れて呉れた人、即ち奥平壹岐だ。壹岐と私とは主客を易えて、私が主人見たようになったから可笑しい。壹岐は元來漢学者の才子で局量が狭い。小藩でも大い家の子だから如何も我儘だ。もう一つは私の目的は原書を読むに在り、蘭学医の家に通うたり和蘭通詞の家に行ったりして一意専心原書を学ぶ。原書と云うものは始めて見たのであるが、五十日、百日とおいく日を経るに従て、次第に意味が分るようになる。所が奥平壹岐はお坊さん、貴公子だから、緻密な原書などの読める訳ではない。その中に此方は余程エラクなものが主公と不和の始まり。全体奥平と云う人は決して深い巧みのある悪人ではない。唯大家の我儘なお坊さんで智慧がない度量がない。その時に旨く私を籠絡して生捕って仕舞えば譜代の家来同様に使えるのに、却てヤツカミ出したとは馬鹿らしい。歳は私より十ばかり上だが、何分気分が子供らしくて、ソコで私を中津に還えすような計略を運らしたのが、私の身には一大災難。……」その隠居が従兄の藤本を呼に來て、隠居の申すに、諭吉を呼還せ、アレが居ては伴壹岐の妨げになるから早々呼還せ、但しソレに就ては母が病氣だと申遣わせと云う御直の敵命が下ったから、固より呑むことは出来ず、唯畏りましたと答えて、母にもそのよしを話して、ソレカラ従兄が私に手紙を寄送して、母の病氣に付き早々帰省致せと云う表向の手紙と、又別紙に、実は隠居から斯う云う次第、余儀なく手紙を出したが、決して母の身を案じるなど許に事實を書いて呉れたから、私は之を見て実に腹が立った。何だ、謂ふ所千々な計略を運らして母の病氣とまで偽を云わせる、ソレナ奴があるものか、モウ批けだ、大議論をして遣らうかと思たが、イヤ／＼左様でない、今アノ家老と喧嘩をした所が、負けるに極って居る、戦わずして勝負は見える、一切喧嘩はしない、アンナ奴と喧嘩をするよりも自分の身の始末が大事だと思直して、夫れからシラバクレて胆を潰した風をして奥平の処に行て、扱中津から簡様申して参りました、母が俄に病氣になりました、平生至極丈夫な方でしたが、実に分らぬものです、今頃は如何云う容体でしようか、遠くに居て気になりますなんて、心配そうな顔してグチャ／＼述立てると、奥平も大に驚いた顔色を作り、左様か、ソリヤ氣の毒な事じゃ、嘘心配であろう、兎に角に早く帰国するが宜かろう、併し母の病氣全快の上は又再遊の出来るようにして遣るからと、慰さめるように云うのは、狂言が旨く行われたと心中得意になって居るに違いない。……」この猿松め馬鹿野郎めと独り心の中で罵り、ソレカラ山本の家にも事實は云われぬ、若し是れが顕われて奥平の不面目にもなれば、禍は却て私の身に降て來て如何な目に逢うか知れない、ソレガ怖いから唯母の病氣とばかり云て暇乞をしました。